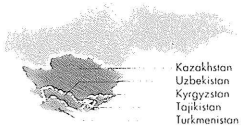
第3章　第二次世界大戦



1939年には，すでにヨーロッパにおいて第二次世界大戦が始まっていた．ウズベキスタン国民が参戦することになるのは，その2年後の1941年6月22日にドイツ軍がソ連の領内に攻め入ってからである．

ウズベキスタンにとって，この戦争は祖国を守るための動員にとどまらず，戦闘地域から疎開人々や工場，医療や教育機関を受け入れるとともに，前線の部隊を支援しなければならず，難題の多い挑戦であった．ここでは，人々の脳裏に多様な形で刻まれた戦争当時の記憶を，人々の目線で追ってみたい．

1.　第二次世界大戦への参戦

1.1　「大祖国戦争」で戦った人々

ウズベキスタンの国民は，第二次世界大戦を「大祖国戦争」と認識している[1]．旧ソ連の他の地域と同様，非常に恐ろしい体験をし，数えられないほどのウズベキスタン人がドイツ軍との戦いで犠牲となった．

前章で述べたスターリン時代に，人々の記憶にもっとも鮮明に残っている出来事がこの「大祖国戦争」である．それはウズベキスタンが人的・経済的に大きな損失を被ったと，国民が自分たちの肌で感じたことの現れである．

戦時中に亡くなったソビエト国籍の人は2,700万人程度と言われているが，その中でウズベキスタン人は26万人と言われている[2]．特に，タシケントから動

1）　第二次世界大戦は1939年に始まり，ドイツのソ連侵攻は2年後の1941年に始まっていることから，第二次世界大戦とソ連の戦争参加時期を区別することは当然であるが，ここで強調したいのはウズベキスタン領内で行われなかった戦闘に参加した多くのウズベキスタン人がその戦いを，祖国（つまりウズベキスタンではなくソ連全体）を解放するためのものとして認識していたことである．

員され参戦した人の中に死亡者が目立つ．当時のタシケントの人口は約47万人だったのに対し，戦争で亡くなった人は5万人にものぼる．

一般民衆の戦争への動員方法は様々であった．ある人は，ドイツ軍がソ連領内に侵攻した段階から前線に立たされたが，他の人は，以下の証言のように，まず訓練学校に送られて，パイロットなど必要とされる専門技術を身に付けてから最前線へと送り出された．

> 私は1938年からタシケントの国民経済専門学校の予備校で経済統計を学んでいた．1941年に戦争が始まると，政府は私をアルマ・アタ（カザフスタン）に送った．そこで重機関銃の扱い方を習得する専門学校に入れられた．重機関銃の重さは70キロもあり，3人がかりでないと持ち運べないくらい重かった．そこで数ヶ月学んで，卒業するとすぐに戦地に送られた．
>
> 戦地ではベラルーシの防衛にあたったりしながら，1944年12月16日まで戦った．この日，戦闘中に右腕を撃たれて病院に運ばれ，肩から下の部分を切断された．モスクワの病院で9ヶ月間，治療を受けることになった．（証言者No. 48，タジク・ウズベク人，男性，ブハラ）

冷酷な運命に遭遇したのは，ドイツ軍の捕虜となった兵士たちである．ソ連兵捕虜に対するドイツ軍の扱いは過酷をきわめたが，その後ソ連軍によって解放されたとしてもドイツ軍の捕虜になっていた間，あまり抵抗をしなかったり，ドイツ軍に情報を流したと疑われたりすると刑務所に送られた[3]．その背景にはもう一つ別の要因があった．かつてロシア革命後中央アジアから国外に逃れた亡命者の一部は，戦時中にドイツ軍の承認を得てソ連軍捕虜の中からソ連軍と戦う意志のある中央アジア出身の兵士を募集し，トルキスタン兵団を編成し

---

2) データについては，I.Karimov, "Rodina svyaschenna dlia kazhdogo", 2004（www.2004.press-service.uz/rus/knigi/9tom/3tom_5.htm 情報取得日：2010年5月11日）参照．戦争中に犠牲となったウズベキスタン人の数に関してカリモフ大統領によって発表されているデータが異なることがある．例えば，2007年の演説の中で，150万人が最前線で戦い，40万人が亡くなったことに対し，2010年の5月に第二次世界大戦における勝利に関する演説の中で，戦争に参加し最前線で戦ったウズベキスタン人の数を150万とし，50万人が死亡，13万人が行方不明になったとして発表された．（本文は前頁）

3) 1920年代にソビエト政権から逃げた中央アジア出身者から構成され，ドイツ軍と協力関係にあった東トルキスタン軍に関しては，A. Ahat Andican, *Turkestan Struggle Abroad : From Jadidism to Independence*, Sota Press, 2007参照．

た．こうしたことから，ドイツ軍の捕虜となった兵士に対してソ連軍は非常に厳しい姿勢をみせた．なかには事情聴取もされず，そのまま処刑されてしまう人も多くいたと言われている．運が良いと再び最前線で戦うことを許され，国に対する忠誠心をそこで証明する機会が与えられた．

> 私の夫はドイツ軍に捕まったが，しばらくすると解放された．しかし，すぐに今度はソ連軍の刑務所に入れられた．理由は，ドイツ軍に十分な抵抗をしなかったためで，ソ連軍は夫を軍事裁判にかけて，ドイツ軍に協力した疑いで，死刑にしようとした．彼は必死の思いで政府宛に手紙を書いて，もう一度戦場に送ってほしいと願い出た．
>
> 戦争が終わってから，彼がいた部隊は罪を血で償った兵隊がいると評価されて，（経済再建のため）テルメズに派遣されることになった．そうしてしばらくして，彼はエンジニアとしてタシケントに移動になり，私たちにはアパートが支給された．その後，家を建てるためにローンを組むことも許されて，生活はどんどん良くなっていった．（証言者No. 3，ウズベク人，女性，タシケント）

兵隊として動員される前には，訓練とともにきちんとした食事が与えられる．これまで受けた訓練の成果を最大限に発揮できるようにという計らいからであった．

戦場に送られる人は，ある程度は覚悟を決めてはいるが，両親や妻子，親類は当然のことながら非常に重い気持ちで見送っていた．わが子を戦争に行かせまいと，必死に拒む親もおり，やり場のない悲しみが以下の証言から伝わってくる．

> 兄はフェルガナ市から呼び出しを受け，戦地に行くよう言い渡された．翌日からすぐに，彼は1週間訓練を受けることになった．その間，おいしい食事と立派な服を与えられ，お風呂にも入ることができた．そうしたこともあってか，兄が戦地に向かう日，見送りに行くと，顔色がとても良く元気そうだった．しかし，見送りに行った私たちは，もう二度と彼に会えないかも

戦争から英雄として息子が戻った時の幸せな一時.【ソ連の英雄であったアジム・ラヒモフとその母親，1945年，ユスポフ撮影】

知れず，辛い気持ちでいっぱいになった.

ある家族は6人いる息子のうち，すでに4人を兵隊にとられていた．そして5人目を連れて行こうと行政の人が家に来た時，その家の母親は大声で泣き叫んで反対した.

私の祖母も母と同じくらい苦しんでいた．兄の服を部屋の真ん中にいつもみえるように置き，それをみながら泣いていた．彼が食べる分のパンは糸で壁に引っ掛けて，戦争から戻ってきたときに「その服を着て，いつでもパンが食べられるように」と言っていた．もちろん無事に帰って来るよう，毎日のお祈りは欠かしたことがなかった．私たちの親戚は本当に運良く，兄も含めて全員戦地から帰ってきたが，近所には黒手紙（qora hat，戦死通知書）が届いたところが何件もあった.

親しくしていた近所の家では，戦争が終わり10年も経ってから息子が帰ってきた．彼は重い障害を負い，あちこちの病院に回され，治療を受けていたそうだ．彼が戻ってきたので，私の姉と結婚させて，花婿として彼を私たちの家族に迎えた.（証言者No. 13，ウズベク人，女性，タシケント）

戦争に行ったまま戻らない人の例は数多く報告されている．彼らはケガの治療のために長年入院したり，記憶をなくしたりして実家や生まれ育ったところ

に帰ることができないでいた．

残された家族は最前線で戦っている身内のことを思うと，何か力になれることはないかと，与えられた労働を必死でこなし，少しでも戦争の勝利に貢献しようとした．

1.2　戦争中の経済支援

ウズベキスタンの貢献は兵士の供出だけではなく，最前線で戦っているソ連軍に食糧や物資を輸送し，戦車や飛行機などを提供したことでも評価された．

ソ連軍に様々な食糧や物資，武器などを提供するために，戦争開始時からウズベキスタン領内のほとんどの工場で製造が始められた．ドイツ軍がソ連の領土を侵略した時点では，ウズベキスタンの経済は農業に頼っており，工場の多くはソ連の西部に位置していた．そのためロシア，ウクライナやベラルーシで工業化がもっとも進んでいた．当然のことながら，これらの地域の工場で働く専門家の数はウズベキスタンのそれをはるかに上回っていた．

ドイツ軍が侵略してくると，ドイツ軍の爆撃により工場が被害を受ける前に，ソ連政府や共産党はその初期段階で工場を国の東部，中央アジアやシベリア方面に移すことにした．そこでより多くの武器を生産することを決断したのである．このようにソ連の生産力を維持した上で，最前線から離れたところで必要なものを安定して生産し続けることができたことは戦争の行方に大きく影響し，その結果をも左右したと言っても過言ではない．

ウズベキスタンに疎開した工場の数は100に上った[4]．これらのうち半分は首都のタシケント市とタシケント州に設置され，残りは主にサマルカンド市とフェルガナ盆地，ブハラ市に置かれた．連邦西部の工場が爆撃を受けて崩壊すると，ウズベキスタン国内に50近くの工場が新設された[4]．

工場の移転から製造開始までの準備は短期間で進められ，工場の稼働と同時にウズベキスタンには多くの専門家が送られた．その理由に，国内の工業化はまだそれほど発展しておらず，これまで技術者とよばれる専門家がいなかったことが挙げられる．そのことは以下からもうかがえる．

---

4)　詳細については，Ibragimova, A. Yu., "Industrial'noe razvitie Uzbekistana v gody Voiny", *Obshchestvennye Nauki v Uzbekistane*, 1995, No.4, 55-61頁参照．

1941年にドイツとの戦争が始まると，私が住んでいた街はドイツ軍に占領されそうになった．そんな時，工場はタシケント周辺の街チルチクに移され，父は母と私を列車に乗せて，自分はドイツ軍と戦うと言って街に残った．

私たちは東へ行く列車に乗ったけれど，どこに行くのかはわからなかった．幸いにも当時の制度として各駅には登録所があり，誰がどこの駅で降りたかがわかるようになっていた．

父は1943年まで戦っていたけれど，ケガをして引き上げてきた．そして私たちを探し出そうと，友人の一人と各駅で降りて登録所に立ち寄り家族の名前を探した．サラトフまで来ると，ようやく私たちを見つけることができてタシケントに連れて帰った．チルチクに化学薬品工場があったので，父はそこの化学薬品工場で働くことになった．

私たちがチルチクに戻ると，村の人は快く迎え入れてくれた．食べ物をもらい，屋根のある家に住まわせてもらった．しばらく経ってロシア（共産党の役人）から手紙がきた．そこにはトゥーラ州の再建のために父にそこへ移るように書いてあったという．父は工場の上司にも部下にも評価されていたので，ロシアに行くことを引き留めようとする人が多かった．ある上司がウズベキスタン共産党の第一書記のウスマン・ユスポフを訪ねて，工場のために父の力が必要だと訴えた．そうまでした甲斐があって，次の日に連絡がきて，父はチルチクに残ることを許された．

父は工場では人事担当の副工場長を務め，その後警察関係の仕事に移り，最終的にウズベキスタン内務省の第一内務副大臣になった．私の兄はモスクワの高等工学校に入学してロケットを専門に製造する技術者になった．彼はチルチクに戻り，父が以前勤めていた工場の一番低いポストからキャリアを積み，チーフ・エンジニアにまで昇進した．しかし，残念ながら彼はガンになり，早くに亡くなってしまった．

私は科学の研究職に就いて，ウズベキスタンの科学アカデミーのもっとも低い地位である下席研究員からアカデミーの最高の地位であるアカデミクにまでのぼりつめた．これまでの仕事が高く評価されて，2年前に政府からウズベキスタン科学名誉学者（*zasluzhannyi deyatel' nauki*）の地位を与えられた．（証言者No. 21，ロシア人，女性，サマルカンド）

工場に次いで，病院や医療施設もウズベキスタンへ移転した．これらの病院はウズベキスタン国内の国家機関や工場の管理下に置かれ，問題なく機能するための環境作りやその責任は各担当機関・工場に委ねられることになった．

ウズベキスタンに移された工場を効率良く稼働させるためには，大量の電力と石炭や金属，化学薬品といった資材が必要とされ，国内はもとより他の中央アジア諸国内にもそのような分野の開発が求められた．その結果，ウズベキスタン国内にはファルハド・ダムを含む七つの電力発電所が作られた．しかし，これらの建設資金はすでに底をついており，ほとんどはウズベキスタンの伝統的な共同作業・助け合いの方式，ハシャルで作られた．ハシャルの特徴は，国民が仕事以外の時間や仕事場から特別に許可を得て勤務時間を変更してもらい，ダムや発電所建設のために無料で働くことである．政府からは原料や設計に関する専門知識が提供されて，ダムは早急に建設され，150以上ある工場には電力が供給されるようになった．

さらに，この時期に国内の冶金産業の基盤も作られ始め，ベガバードの冶金工場建設も始まった．戦後，ベガバード冶金工場では日本人の捕虜も働くことになる．ベガバード以外にも工場が次々と建設され始め，1941年から1945年の間にウズベキスタンの経済は，特に工業分野においてめざましい発展を遂げた．

しかし，工業分野のみの発展では戦争に必要とされるすべてのものを作り出すことは不可能である．工場で製品を加工するための原料や戦闘地域への食糧の提供は，武器や機械の提供と同じぐらい重要な問題であった．そのことから，農業のさらなる発展も非常に重要な課題とされ，そのための様々な努力がなされた．

コルホーズやソフホーズ内で働いていた人の多くは工場で働く人と同様，長時間の労働を課され，綿花以外にも野菜や果物が採れるように努力した．なかでももっとも大きな問題は，新しく農作物を作るための水の供給である．この乾燥した地域では水の供給がなければ農作物が育たないこともあり，水源を求め，耕地までの水路を作る必要があった．そのため，2ヶ月間にいくつもの水路やカナルが北タシケント，上チルチク，北フェルガナ，ソフ・シャヒマルドン，ウチ・クルガンなどで建設され，カサナイスク，カッタクルガン貯水池に作られた．それが農業生産の拡大，食糧生産の向上，家畜の増産などにつなが

った．さらにウズベキスタンから多くの農業専門家が西部ロシアやウクライナ，ベラルーシなどのドイツ軍から奪回した地域へ送られ，農業の再建を支えた．

1.3 戦争に対する多様な態度

第二次世界大戦では，ウズベキスタンの人々のソビエト政権への忠誠心が試されることとなった．国内にいた人は共産党や政府に動員されるか，自発的に戦争に行くしかなかった．共産主義に対する強い信念を持つ人は，この戦争を資本主義体制のドイツと共産主義体制のソ連との戦いとみていたが，ほとんどの人にとってこの戦争は，単純に自分たちが生まれ育った土地の存続，戦争に行った家族の無事と自分たちが生き残るための戦いであった．

さらに複雑な気持ちでこの戦争をみていたのは，かつてソビエト政権の抑圧から逃れようとしてアフガニスタンやイラン，トルコ，中国などに逃れた人たちだった．彼らは自分たちの生活と財産を奪ったソビエト政権を恨み，政権の敗北を待ち望んでいた．

これらの中間的な地位にいたのは，ウズベキスタンに住みながらも政権に恨みを抱き，かつ怯えながら暮らしていた人たちである．彼らに政権のために戦おうという気持ちはなく，戦争は新たなる混乱の始まりでしかなかった．ひたすら身分を隠し，それまで以上に厳しくなった監視や不信の目から逃れようとした．彼らは必ずしもソビエト政権の打倒をめざしたのではなく，自分たちの社会的立場の回復を望んでいた．それは以下の証言が物語っている．

> 父は自分がカーディー（イスラーム法の裁判官）の息子であることを引きずって，ずっと怯えていた．それで父の素性が知れわたっている村を離れることにした．
>
> その立場は非常に複雑で，どれだけ昔のことを隠して暮らしていても，新しい政権からはカーディーの息子として疑われていた．新体制の下で学校の教員をしていたが，古い体制支持者（コルボシ）からも嫌われた．古い教育と体制を支持する人が，父は子どもたちに間違ったことを教えているとして怒り出したという．
>
> ある日，父はコルボシの隊長に捕まってしまい，殺されかけた．そのコ

ルボシがカーディーであった私の祖父の家を遠い昔に訪ねたことがあり，父の顔を覚えていたそうだ．命までは奪われずに済んだが，その時，コルボシは「お前の顔を二度と私の前にみせるな」と，父を脅した．ここにいては殺されると思った父は，私たちを連れて村を離れたが，ソビエト政権とコルボシの両方に怯えながら暮らしていた．

1941年にドイツと戦争が始まると，父が興奮した様子で帰ってきたことがあった．母に「荷物をまとめろ，村に帰るんだ．戦争が始まったからスターリンも誰も，われわれ（の過去）に関心がなくなった」と言った．父にとっての戦争は，元の生活に戻れる唯一の機会だったのだ．（証言者No. 44，ウズベク人，男性，コーカンド）

もう一つの証言は，戦時下にソビエト政権と海外の反ソビエト組織にはさまれ苦しんだ人の例である．彼は海外に在住し，ソビエト政権とも協力しながら工作活動を行っていたが，それにもかかわらず，ソビエト政権から疑いの目を向けられていた．

父は中国で生まれたウズベク人で，中国でソ連のために何らかのスパイ活動をしていたらしい．中国にいた時もソ連大使館と関係を持ち，大使館に面倒をみてもらっていた．しばらくしてから父は留学というかたちでタシケント医科大学に入学した．それは国費留学ではなく，完全な私費留学だったので，そのお金の出所がどこかと疑う人は大勢いた．実際，お金は彼が長年していた貯金を使っていた．

周りの人が自分に不信感を抱いているのがわかっていたので，父は誰かと話す時にはいつも言っていいことと，そうでないことを慎重に考えて話していたという．友達同士でアネクドート（小話）を語り合っていても，それが次の日には秘密警察などのしかるべき機関に報告されていたといった具合だったから，怯えながら生活していたそうだ．（証言者No. 22，ウズベク人，男性，ナマンガン）

2. 戦時下の生活

2.1 労働時間の延長

戦争開始直後から労働時間が延長され，残業時間が増えた．1日の労働時間は13時間にも及び，1週間のうち日曜日を除いて過酷な労働が続けられた．その間は休職も，夏期・冬期休暇も禁じられた[5]．

軍事用品を作る工場の労働者は，兵隊と同様戦争に動員された扱いとなり，彼らの労働は従軍と同じにみなされた．各工場では労働チームが組まれ，チーム間でより質の高い製品と製造の効率を上げるための競争が日夜繰り広げられていた．

戦時の労働基準は厳しさを増し，出勤の実態に関する管理は厳密に行われ，欠勤に対する厳しい処罰も執行された．過酷な労働基準はウズベキスタン国内のほとんどの工場で用いられていた．それに加えて，労働者はロシアやウクライナ，ベラルーシの工場へ送られ，戦争中にもかかわらず，その地域の経済力を高めるために一所懸命働いた[6]．

労働者の監視は非常に厳しく，それに耐えることは容易ではなかった．彼らを管理する人でさえ，このような労働環境の中で働くことを気の毒に思い，規律を若干乱すことがあったとしても見逃そうとしたほどである．彼らと一緒に働いていた人は共同作業所でのことを次のように語る．

> われわれは飛行機を製造する工場で働いていた．仕事は大変だったけれど，ウズベク人やキルギス人と比べると，ずっとましだった．私たちロシア人は自分たちの土地で働くことができたんだから．彼らは中央アジアから連れて来られて工場で働かされ，しかも服装は気候に合ったものではなく，特に冬はあまりの寒さにとても困っている様子だった．

---

5) 戦時中のソ連時代の工場での労働については，A.K.Sokolova, "Rezhimnost' na sovetskikh predpriiatiiakh", T.S.Kondrat'eva, A.K.Sokolova, *Rezhimnye lyudi v SSSR*, Moskva : Rossiiskaia politicheskaia entsiklopediia, 99–127頁参照．

6) ウズベキスタンの労働環境は，戦時中のロシアの労働環境とそれほど相違はなかった．戦争時のロシアにおいての労働に関する証言については，Natal'ya Kozlova, *Sovetskie lyudi : Stseny iz istorii*, Moskva : Evropa, 2005, 276–278頁参照．

私に課せられた役割は，毎朝彼らが仕事に来る時間を記録することだったが，私はそれが一番嫌いだった．遅刻する人がいたらその人（の書類）を裁判所に送らなければならなかったからだ．

裁判は5分足らずで終わり，彼らの遅刻の言い分を聞く人なんていなかった．ただ処分を受けるだけだった．彼らが気の毒に思えて，私はできる限り遅刻をしてもみてみぬふりをした．しかし，私の上司に共産党員の女性がいて，見逃していることがばれると，それはひどく怒られた．（証言者No. 28，ロシア人，女性，ナマンガン）

こうした緊迫した労働環境の中で，着る物すらないままにウズベキスタンから移動してきた労働者がロシアやウズベキスタン以外の共和国にある工場で働き，勝利へと大きく貢献した．彼らが直面していた生活上の問題は，ウズベキスタンに残された家族の経済状況とそれほど異なっておらず，戦争中の国内の状況も大変厳しいものであった．

2.2　戦時下で生き残るために

戦争開始と同時に，被占領地域から難民や国家政策の一環としてウズベキスタンに移された人の数は非常に多かった．その数は100万人にものぼり，そのうちの20万～25万人が子どもであった．住む場所や仕事，教育，医療面において，早急に生活環境を整える必要性があった．一つの家庭で10～15人の子どもを引き取り，育てていたところもあるという．人々が移住者の受け入れに積極的に応じたおかげで，労働者の派遣が問題なく行われ，それが勝利へ導いたことも忘れてはならない側面である．

人口が増えてくると，人々の生活は戦前と比べると当然厳しいものになってきた．前章でもふれたように，都市部において食糧配分制度が導入された．労働者や公務員は1日当たり400～500グラムのパンを配給され，配偶者や子どもに対しては，1日当たり300～400グラムしか与えられなかった．しかし，配給される食糧はその数量が基準に満たないことがよくあった．このような配給制度は小麦，肉，魚，油に対して導入された．農村部の住民にはこの制度は適用されなかったが，その代わり自分たちが作った農作物のほとんどを政府に提供

していたために，都市部よりは比較的暮らしやすいとはいうものの，それでも厳しい状況であった．

配給は各世帯の構成人数で決められていたので，戦争に動員された人の分も支給された．それで助かった家族も少なくなかった．ある人は，この制度について以下のように語った．

> 戦争が始まったのは（1941年）6月21日だったが，私の夫が戦地へ連れて行かれたのは6月23日だった．私もその10日後，病院に勤務するよう政府から連絡を受けたのでそこで勤めることになった．
>
> 彼が戦地に行っていたため，優先的に食糧品を支給してもらえる配給カードをもらった．そのカードと，病院から支給される食糧で何とか生活ができた．（証言者No. 31，ロシア人，女性，アンディジャン）

労働者や公務員の給料は上がったが，お金の価値は下がり，食糧品も不足していたため，お金を持っていても食べる物を買うのは困難を極めた．人々は朝から配給所に並び，食糧品の在庫がなくなると，並び直さなければならなかったため，緊迫した面持ちで自分の順番を待っていた．

> 私たちはパンを買うために手に番号を書いてもらい，長い列に並んでいた．夜中の2時か3時にまた番号と順番の確認があるので，その時その場所にいなければもう列には入れてもらえなかった．（証言者No. 31，ロシア人，女性，アンディジャン）

同じようなことが別の人の記憶にも残っていた．

> 第二次世界大戦の時，私はまだ中学校に通っていた．14歳に達した若者が戦争に連れて行かれるほど，苦しい時期だった．
>
> 1日200グラムの黒パンを支給されていたが，手に入れるためには朝の4時からお店に並ばなければならなかった．もし，パンが売り切れになってしまったら午後にもう一度行って並んでいた．私たちは長く肉やバターといっ

たものをみたことがなかった．（証言者No. 39，ウズベク人，男性，フェルガナ州）

配給された食糧品を家族間で分け合って，お互いを頼りながら生活しないと生き残ることは不可能だった．しかもそれは1世帯単位ではなく，同じコミュニティの中でのことだった．彼らにとって戦争は一時的なものであり，古くから関係を大切にしてきたコミュニティ内で支え合いながらこの時期を乗り越えようとしていた．

食べ盛りの子どもに好きなだけ食べさせてやりたいと思うのはどこの親も同じだが，当時は量を制限しなければ子どもにすべて食べられてしまい，それでは家族が生きることが危うくなるほど食べていくのが大変な状況だった．

四角いパンが配給されると，家族でそれをどう分けるかという決まりがあった．それぞれの体の大きさに合わせて食べる量が決まっていた．

私の家族は皆体が大きくて，私だけ小さかったため1日に食べる量はミルク1杯とパン一口だったが，そのパンも兄たちに狙われていた．自分のパンを別の何かに交換する約束をした時もあったけれど，実際には交換するものがないので自分の分を兄たちに渡していた．そうやって皆で何とか生き延びた．（証言者No. 39，ウズベク人，男性，フェルガナ州）

また，以下のように，ただでさえ厳しい状況をさらに悪化させることもあった．

パンの支給日にはその日の分と次の日の分をまとめてもらうことになっていた．例えば30日に行けば31日の分のパンももらう．

しかし，私は中学生だったので，つい全部食べてしまう．そうすると次の日のパンがなくなって，もう1日中お腹が空いてたまらない．我慢ができずに泣いていた．歌を歌ったりして気持ちを紛らわそうとしたが，駄目だった．空腹に耐えかねて近くの畑に行き，土の中に残っていたジャガイモを探し出して，それを粉にしてパンを作って食べた．（証言者No. 39，ウズベ

ク人，男性，フェルガナ州）

厳しい生活状況の中で，大人だけではなく子どもたちも両親とともに食糧品の調達を手伝いながら仕事をし，その合間に勉強もしていた．

2.3 戦争中の教育

戦争開始以前からソビエト政権はコレニザーツィヤ政策の一環として，中央アジア地域で教育を受ける人の数を増やすとともに，教育の質の向上に努めてきた．その過程で達成された目標もあったが，ウズベキスタンをはじめとする中央アジア諸国においては，経済や教育問題が大きな課題としてあった．加えて，これまで国民全員を対象とした教育制度が存在していなかったために戸惑いも大きかった．そういう意味ではウズベキスタンの教育は戦争開始以前から課題が山積みだった．

戦争が始まった際，工場の例と同じく教育機関も戦闘地域からウズベキスタン国内へと移された．その内訳は22の研究所と16の大学，二つの図書館である[7]．ソ連の発展に多大な功績を残した研究者がウズベキスタンに移ってきたのである．1943年には，様々な分野の研究者がウズベキスタンに集中していたこともあり，ウズベキスタン科学アカデミーが設立された．

ウズベキスタン科学アカデミーは国内のほとんどの研究機関を傘下に置き，一部の教育機関と連携して，最先端の研究を行う機関であり，一つのネットワークとしての機能を促進するために作られたものである．この時期，ウズベキス

【戦争の最前線からタシケントに疎開させられた研究者，知識人】

タン国内の研究機関の数は41，専門教育訓練機関は52までふくれあがった[7]．

また，占領されたベラルーシやウクライナ，ロシアの一部からも大学や専門学校の移動があったが，これらの研究・教育機関が各地へ移動して機能し始めるまで，実際にはかなりの時間がかかった．戦争が本格化すると，教員や学生は軍隊に動員され，残りの人は労働者として工場などで働かなければならなかった．もともとウズベキスタンにあった学校や他の教育機関にも学生の労働が義務付けられ，43年頃まで十分に機能していなかったことが証言からもわかる．

> 戦争が始まると学校は閉鎖されてしまった．1943年には授業が再開されたけれど，私は弟と同じ学年に入って授業を受けなければならなかった．しかし，弟はそれを嫌い，自分の教室に私がいるなら勉強はしないと言い張っていた．彼は両親や叔母にも叱られたが，それでも私が教室に入ると家に帰ってしまうことが何度もあった．私は彼に勉強して欲しかったので，学校をやめることにした．（証言者No. 39，ウズベク人，男性，フェルガナ州）

戦争の影響で子どもたちの教育に遅れが生じた．以下の例のように，多くの場合，同じクラスに複数の学年の生徒が入っており，1年生は1列目に，2年生は2列目に，3年生は3列目に座らされた．学年が少ない学校でも年齢の違う子どもが同じクラスで勉強していた．

学校の先生は教育を受けた貴重な人材として，現地の国家機関に頼りにされていた．ただ子どもたちを教えるだけでなく，農村部ではソビエト組織の仕事を手伝わされた．以下の証言はその状況を明確に表している．

> 母は父と同じ村で暮らしていて，現地の学校で教員をしていた．彼女のクラスには1～4年生までが入っていて，1年生は1列目，2年生は2列目といった具合に4年生までが座っていた．そこで，学年のレベルに合わせて宿題を与えて，授業をしていた．

7）データの詳細については，Uzbekistan V 20-e-40-e gody XX Veka, Ministerstvo Inostrannykh Del（www.mfa.uz/rus/ob_uzbekistane/ist_dostoprim/uzb_1924-1991/, 情報取得日：2010年2月26日）参照．

そのような教育活動と並行して，母は読み書きができたのでコルホーズの集会も手伝っていた．集会では事務員として，その日の議題などを記録していた．（証言者No. 24，ウズベク人，男性，アンディジャン）

3. 戦　　後

3.1 戦後の苦難

国民は戦争で大きな犠牲を払い，その代償として勝利を手にすることができた．しかし，彼らが直面した課題はこれで終わったわけではなかった．むしろ，戦後になってから，社会の建て直しという新たな戦いに参加することになった．

物がない中で，皆前向きに生きようとしていた．子どもたちは将来良い仕事に就きたいと，貧困の中で勉強をした．しかし，現実にはこのような状況で勉強することは簡単ではなかった．

私たちにとって1945年から1947年まではもっとも厳しい時期だった．ご飯も満足に食べられず，勉強しようにもペンやノートなどなかった．

今でも記憶に残っているのは，親に鳥の羽から作ってもらったペンだ．それにインクをつけて書くのだが，まずその羽を見つけるのが大変だった．だからペンを作ってもらうこと自体，とても贅沢なことだった．

ペンもないのだから学校に持って行く鞄だってあるわけがない．ふろしきのようなものに本を包んで，その外側にもう一つ小さな袋を結び付けた．なかにはインクの入ったカップが入っている．学校の帰りに友達とちょっと遊んだりすると，必ずインクがもれて，いつの間にか顔や手が黒くなってしまっていた．家に帰ると，手伝いもしないで遊んでいたのかと，よく親に叱られたものだ．（証言者No. 11，ウズベク人，女性，タシケント）

多くの人は貧しい生活を気にすることはあまりなかった．彼らは戦争を無事に終わらせ，これからは新しい平和な社会の中で生きられることが，何よりの幸せだと感じていたからである．こうした姿勢はウズベク人やウズベキスタンに暮らす人々のメンタリティにも反映された．物が不足していても平和でさえ

あれば，どのような問題も解決できるという信念があった．人々は困難な状況に直面しても「すべては神（アッラー）のおぼし召し．平和さえあれば何でもできる」と言っているのをよく耳にしたという．

また自分たちが勝ち取った勝利は共産党や政府のおかげであり，共産党やスターリンはもとより，ケガを治療してくれた医者に対しても大変感謝していた．元兵士が当時のことを以下のように回想している．

> 私は，自分や他の兵士を診てくれた医者や看護婦に本当に感謝している．そして，私たちを見捨てなかった（共産）党にも感謝している．
>
> ケガが治って退院してから，私は「英雄の勲章」や「二等祖国戦争勲章」といういくつかの勲章をモスクワのクレムリンでもらい，実家に帰ってからは「一等祖国戦争勲章」までもらった．私が実家に戻った時には父はすでに亡くなっていたが，母は生きていてくれた．妹も生きていたけれど，しばらくたってから家を出て，行方不明になったままだ．それ以来，妹とは会っていない．当時は生活していくことが非常に厳しかったので，それぞれができる方法で生き残るしかなかった．今でもそれについては書くことも話すことも大変つらい．
>
> それから私はフェルガナ教育大学に入学し，ロシア語を専攻した．卒業後は，高校のロシア語教師になった．妻とは同じ学校の教員だったため，そこで知り合った．私はその後，校長まで昇進した．（証言者No. 38，ウズベク人，男性，フェルガナ）

戦争が終わると，農村に暮らしていた人は都市部に戻り始めた．彼らは都市部で新しい仕事に就くことや教育を受けることを求めた．しかし，経済状況は一向に改善されず，就職や勉強の機会を得ることはそう簡単ではなかった．ある人は戦後の社会の貧困をこのように記憶していた．

> 戦時中はコルホーズで働いていたので，私にはある程度食糧品の支給があった．それに裏庭にはジャガイモの畑があり，何とか生活が成り立っていた．

私は1946年にタシケントにやって来た．食べる物は何とかなったものの，まだ若かったのでちょっとしたアクセサリーを身につけ，良い服も着てみたいと思った．それで，あるユダヤ人の家で家政婦として働き始めた．

驚いたことにそのユダヤ人は，理由はよくわからないけれど，たくさんのお金を持っていた．彼らの家に半分住み込みで働いていたので食事にも困らなかった．（証言者No. 37，ウズベク人，女性，タシケント）

3.2　日本人との接触

タシケント市には，日本人抑留者の労働の成果として象徴的な建物がある．それはナヴォイ・オペラ劇場で，現在もタシケントの中心地に建っており，大きさや外見の美しさから周りの建物の中でひときわ目立っている．

この劇場は，ウズベキスタン国民から憧れと尊敬のまなざしでみられていた．このことは日本人の労働の質の高さの現れである．そしてウズベキスタン再生の大きな一歩となった．

ナヴォイ・オペラ劇場のデザインは，ロシア人の建築家で，モスクワの赤の広場にあるレーニン廟を設計したシュセフ氏である．この劇場の建設は戦前から始まっていたが，戦争中は一端中断された．1943年に再び建設が始まると，日本人の捕虜が到着したこともあって，作業はさらに加速して進められた．

ソ連時代に，この劇場の建設に外国人が関わっていたということを記録した文書は公表されていなかったが，人々の間では日本人捕虜が建設現場で働いていたことは知られていた．これは建設現場にいた責任者の一人から聞いた言葉である．

日本人たちは現場で資材をみると「こんなものを使ったら，この建物は200年もしないうちに壊れてしまうぞ！」と怒り出した．（証言者No. 9，ウズベク人，男性，タシケント）

その言葉には日本人の仕事に対する責任感とメンタリティが反映されていた．日本人の労働者と接触したことがなかったとしても，物作りへの細やかな姿勢とこだわりは，この建物を通して人々に伝わり，日本に対するプラスのイメー

【優秀農民労働会議が開かれたナヴォイ劇場の建物，1954年，タシケント，ドシュキン，ラズコフ撮影】

ジが形成されていった．

私は，アリシェル・ナヴォイ劇場は，ロシア人の建築家によって設計されたこと以外，よく知らなかった．ある日，母と劇場のそばを通ると，外見は他の建物と比べものにならないほど立派で，細部にわたって手の込んだ装飾がこらされていた．洗練された技術の中に，それに込められた温もりまで感じられた．私は母に建物の歴史を聞いて，それが日本人捕虜たちによるものだと知った．私にとって劇場は，ソ連以外の人と初めて接触したひとときのように思えた．

劇場はタシケント大地震でも壊れることがなく，最近になって修繕工事が行われた．色がはがれたところを塗り直したり，ひびを隠したりする程度の外見的な工事で終わった．それくらい丈夫に作られていた．（証言者No. 7，ウズベク人，女性，タシケント）

ま と め

以上みてきたように，ウズベキスタンは第二次世界大戦の戦地とはならなかったが，多くの人々はこの戦争を「大祖国戦争」として認識し，記憶している．その理由の一つに，一般民衆の中から多くの人々が戦争に動員され，前線でドイツ軍と戦う兵士を支援し，また戦火を思い，胸を痛めたことが挙げられる．その支援の形は様々であり，戦地から次々とウズベキスタンに疎開させられてきた人々の支援にもつながった．これにはウズベキスタン国民のメンタリティが如実に現れており，特に，戦争を嫌い，困っている人には必ず援助の手を差し伸べたことや，限られた物（食品や洋服）を分かち合ったことが興味深い．

同時に，この時期はウズベキスタンの基幹産業や様々なインフラが整備された時期でもあり，ロシアや戦地から移転された教育機関がウズベキスタンの近代教育と科学の発展・拡充を支えた．また，当時，多くの学者がウズベキスタンで活躍し，彼らの支援のもと優れた教育・研究基盤が作られた．

もう一点，興味深いことは第二次世界大戦の結果，多くのウズベキスタン人が初めて日本人と接する機会を得たことである．第二次世界大戦後にシベリアを経由しウズベキスタンに連れて来られ，様々な建設現場で働いていた日本人捕虜との交流はその発端となった．現在でも，タシケントの中心部には日本人捕虜が建設に従事したアリシェル・ナヴォイ劇場が残っており，その精巧な作りと1966年のタシケント大地震でも壊れなかった頑丈さは，日本人の性格と技術をウズベキスタン人に伝えている[8]．

---

8) ウズベキスタン人と日本人抑留者の関係については，ウズベキスタンに抑留された人物の日記からも知ることができる．例えば，植田彪『シルダリアの彼方に―中央アジアに六年，戦友の墓を探して―』，十年社，2004年参照．